

審議会等の会議結果報告書

課所名

高齢者福祉課

会議名

令和6年度諏訪市認知症初期集中支援チーム検討委員会

開催日時

令和6年7月1日(月) 19時00分 から 20時 35分まで

出席者

検討委員：
守屋 和則健康福祉部長(委員長)、植松 洋子副委員長、小島 洋二委員、
兼子 一真委員、福田 和博委員、桜井 幸雄委員、竹内 幸子委員、
降旗 香代子委員、原 毅委員、藤原 希美委員、今村 貴保委員、
宮坂 恵美子委員、松本 宙明委員、
事務局：
高齢者福祉課長 宮坂 吉郎、高齢者福祉係主査 両角 あずさ、同係主任 黒川 直美
ライフドアすわ 小澤認知症地域支援推進員

資料

- ・諏訪市認知症初期集中支援チーム検討委員会 次第
- ・諏訪市認知症初期集中支援チーム検討委員会 名簿
- ・諏訪市認知症初期集中支援推進事業実施要綱・図
- ・諏訪市の高齢者の状況
- ・諏訪市認知症初期集中支援チーム員名簿
- ・諏訪市認知症初期集中支援チーム 初期集中支援業務の基本的な流れ
- ・チーム員会議にて共有した包括支援センターに寄せられた相談
- ・ライフドアすわに寄せられた相談
- ・認知症初期集中支援チーム員会議実績、支援実績
- ・検討事例の経過
- ・チームオレンジについて
- ・見守りネットワーク事業について
- ・認知症高齢者等見守りシール交付事業について
- ・認知症高齢者の個人賠償責任保険事業について
- ・諏訪市高齢者等補聴器購入助成事業について

協議議題（内容）及び会議結果（要旨）

1 開会【司会 宮坂課長】

2 委嘱状交付

- ・机上交付

3 挨拶【守屋 健康福祉部長】

4 自己紹介

5 正副委員長選任

6 協議事項【進行：委員長 守屋健康福祉部長】

(1) 検討委員会について【黒川】

- ・資料に基づき委員会の位置付けについて説明

(2) 諏訪市の高齢者の現状【黒川】

- ・資料について説明
- ・市全体の高齢化率は、31.3%。上諏訪地区は高齢化が進んでいる。
- ・2050（R32）年には高齢化率 40%を超える見込みとなっており、認知症高齢者の推移についても増加が見込まれる。
- ・介護認定は要支援者の増加。コロナ禍の影響も出てきている可能性もあり、より一層早いうちからのフレイル・介護予防、適切な支援や重症化予防が必要。

(3) チームの活動状況等報告【黒川、両角、小澤】

- ・資料に基づき説明
- ・チーム支援の基本は、認知症の相談を受け専門職による訪問を行い、チーム員会議で支援方針を検討、おおむね6か月を目途に支援の実施を行うが、個々のケースによって支援は様々。
- ・チーム支援の実績について。令和5年度のチーム支援は3件。2件は終了、1件は継続。認知症の相談について172件中57件、チーム支援対象者と合わせ、チーム員会議での検討件数は64件。
- ・かかりつけ医がいる、すでに介護認定を持っている方の相談も多く、包括支援センターの総合相談の中で対応できるためチームで関わるケースは少ない。
- ・かかりつけ医など地域の先生方から認知症診断パスで日赤との連携ができています。日赤と包括も必要に応じて情報共有が図れるようになっている。
- ・チームの活動が8年目となり、毎月の会議の経験が積み重なり、対応力が向上していく。
- ・ケースの経過報告

(1)から(3)について質問

→ なし

(4) 各機関の取組状況 《発言趣旨》

①チームオレンジについて

チームオレンジとは認知症と思われる初期の段階から、心理面・生活面の支援として、市町村がコーディネーターを配置し、地域において把握した認知症の方の悩みや家族の身近な生活支援ニーズ等と認知症

サポーターを中心とした支援者をつなぐ仕組み。近隣の認知症サポーターがチームを組み、認知症の人や家族に対する生活面の早期からの支援等を行う取組で、認知症の方もメンバーとして参加する。

2019 年（R1）の「認知症施策推進大綱」では認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる「共生」と通いの場の拡大などの「予防」を目指し、令和 7 年までに全市町村でのチームオレンジ等の整備をすることと掲げられており、諏訪市でも社会福祉協議会を中心に準備が進められている。

諏訪市のチームオレンジについての取組としては、国が示したチームオレンジ三つの基本を踏まえて、①認知症の人でもそうでない人も参加しており活動を楽しんでいること。②困った時の相談先を知っていること。③団体等に認知症サポーターが 1 人はいること。を認定の条件の案としたいと考えている。令和 5 年 9 月よりオレンジサポーターの登録制をスタートした。オレンジサポーターというのは、認知症サポーター養成講座とステップアップ講座の受講をされた方。現在 9 名の方が登録している。チームオレンジは、認知症サポーターが新たに力をふるう場として期待されている。

令和 5 年は認知症サポーター養成講座を年間 11 回、延べ 237 名の方が受講した。ステップアップ講座受講者は 20 名。諏訪市のこれまでの認知症サポーター養成講座累計受講者数は 4,354 名。人口に占めるサポーターの割合は 8.99%。まずは人口の 1 割を目指している。

〈委員長〉

チームオレンジですが、何か新しいことをするというよりは認知症サポーターを中心に今ある仕組みを少しずつ膨らませながら進めていく、そんなイメージを持った。認知症サポーター養成講座を社会福祉協議会に諏訪市が委託している。講座の様子や、課題等何か現状として意見交換できることがあれば発言をお願いしたい。

〈委員〉

そもそも当時は、全国的に 100 万人認知症サポーターを増やそうということで認知症キャラバンが始まった。現在 1,000 万人を超えている。認知症サポーターについては、認知症のことを知って温かく見守る、まずは地域の理解を深める目的で行っている。その先にチームオレンジがある。認知症サポーターのステップアップ講座を受けた人たちが本人と一緒に本人を支える、地域の中で広げていくということで進めてきているところ。認知症サポーターを増やしながら、チームオレンジの活動を増やしていきたい。コロナもありなかなか進まなかったが、ようやく活動を進めつつあるところ。ぜひそういった活動があるということを知りいただき、関心のある方は認知症サポーター養成講座を受けて、チームオレンジに認知症の方をつないでほしい。

〈委員〉

キャラバンメイトで養成講座に行く機会が多いが、認知症サポーター養成講座の一般市民の参加が少ないというのを感じる。毎年、清陵中学校には行っているが、もう少し他のところからも声がかかると思う。キャラバンメイトとは別に、在宅介護のケアマネジャーとしては家族が意外と理解ができていないと感じている。

〈委員長〉

キャラバンメイトとしての取組の他にも普段の業務の中からもご意見をいただいた。チームオレンジは、認知症サポーターを中心にいろんな資源を使っていくことが大事になっていく。認知症カフェの関係や、

諏訪市でも職員向けに認知症サポーターの養成講座を実施していると聞いているので発言をお願いしたい。

〈小澤〉

ライフドアすわでは、認知症カフェ「えがお」を毎月第3火曜日午後1時～2時半で行っている。認知症カフェには認知症の方、その家族、認知症に関心のある地域の方、その他専門職、ケアマネや、包括支援センターの保健師、認知症疾患医療センターの看護師など専門職も参加し、日頃の悩みや情報交換をしながらリフレッシュできる場となっている。認知症カフェの目的としては専門職がいるので、認知症に関する悩み、心配事がすぐその場で相談できることが認知症カフェの強みになっている。このカフェは自由に誰が来てもいいし、何時に来て何時に帰ってもいいものになっている。ぜひ、認知症について心配がある、認知症について知りたいという方がいれば、ライフドアすわの認知症カフェをご案内いただけるとありがたい。

〈黒川〉

市の職員を対象に市民サービス向上に係る職員研修として認知症サポーター養成講座を毎年5月頃に行っている。キャラバンメイトの皆さんに来ていただき、寸劇などを交えて、実際に認知症の方にどのように関わると安心して相談ができ、手続きが行えるかというところを教えていただいている。日々、市役所には多くの市民の方が来庁される。認知症という病気を知って、どのように対応できるか、市民の方が安心して生活していけるにはどうしたらいいかというところを市の職員も学ぶことで、サポートの輪が広がっていいと良い。

〈委員長〉

認知症の方たちを支援するための資源について話をしていただいた。国の方の大綱では令和7年に各市町村でできるように整備をと目標ができていますので、諏訪市としてもどういったことができるのか検討していきたいと思っているが、他地域でこんなことをしているとか県の動きについて情報があれば発言をお願いしたい。

〈委員〉

他地域での取組についてはわからないが、県のほうでも認知症カフェやチームオレンジのような、地域で認知症と家族を支える仕組みがある市町村数というのを令和8年までに100%を目標にしている。その中で63市町村に認知症カフェやチームオレンジがあるということが統計としては把握できている。県としても認知症の人を地域で支える観点から認知症サポーターやチームオレンジの設置に向けた支援、医療従事者に対する理解促進のための研修などに取り組んでいる。具体的な支援としては伴奏型支援事業や住民主体の通いの場と推進支援事業があり、その中で認知症アドバイザー派遣等によるチームオレンジの立ち上げ支援や認知症カフェの支援を市町村に対して行っているという状況。これは県の介護支援課のほうで行っている事業になるので何かあれば問い合わせをしていただいてもかまわないということだった。

〈委員長〉

ホームページなどを見ると、チームオレンジという名のおりきれいなオレンジ色の表紙をつくりながら全国的にいろんな事例が出ている。市としても国のチームオレンジ3つの基本を案としながら令和7年度、令和8年度の100%に向けて取組を進めていくといった形になると思われる。また幅広いところから

ご意見をいただき、何かいい情報があればぜひ共有させていただきたい。

②見守りネットワーク事業について

令和3年度から開始されている「見守りネットワーク事業」は市と民間事業所や警察など関係機関が連携し、高齢者の異変や行方不明が発生した場合に早期に気付き、支援につなげる取組。事前に登録しておくことで万が一の時に迅速に対応することができる。現在、25名の方が登録されている。

ネットワーク事業では、令和5年度までに20事業所と協定を結んでいるが、情報提供は令和5年度は10件。警察から3件、銀行から1件、新聞店より6件あった。

同じく令和3年度から開始している「認知症高齢者等見守りシール交付事業」は行方不明になった高齢者を早期発見・保護するため、QRコードのついたシールを交付するもの。シールに印字されコードを読み取ると保護者に発見通知メールが届き、発見者と伝言板サイトでやり取りができる。現在22名の方が登録している。QRコードを読み取るためにどのように近づいたらいいのかわかるとの意見をいただくことがある。シールを管理している業者に相談してみたところ、見守りシールはQRコードを読み取ることが目的ではなく、シールを貼っている方を見かけたら、警察に通報する、健康状態に問題がありそうなら救急車を呼ぶでもよい。一緒に待っている間にQRコードを読み取っていただければいいかと思う。つまり、シールを様々な方に、より多くの方に知っていただくことが重要だと考える。令和5年度は上諏訪駅前でイッシュ配りを行ったが、今年度も周知活動を行っていきたい。

「認知症高齢者の個人賠償責任保険事業」は令和5年度から開始している。認知症高齢者が他人に怪我を負わせてしまった、人の財物を破壊したなど、法律上の損害賠償責任を負う場合に備えたものになっている。保険会社の審査があり、損害賠償額最大1億円まで保証できる。保険料は市の公費で支払うため利用者の負担はない。現在17名の方が登録している。

お守りのようなものではあるが、この3点で諏訪市の認知症高齢者の在宅生活を支えていきたい。

③高齢者等補聴器購入助成事業について

今年度4月からの新規事業。加齢に伴う難聴が認知症発症の大きな要因となるということで認知症予防を目的に高齢者等補聴器購入助成事業を始めている。対象者の要件が5つある。助成額は、補聴器購入費用の3分の1で、上限は3万円。皆さんの周りに難聴の高齢者がいる場合や、補聴器の相談があった場合、こういった助成制度があることを紹介していただきたい。

〈委員〉

諏訪市の見守りネットワーク事業は大変素晴らしいものだと思う。行方不明者が発生した場合は、警察官総出で、その日の勤務員をできる限り増員して探す、行方不明者発見するためのポイントとしては、いかに多くの方に情報を提供して、その情報に触れた方が警察署に通報していただけるか、それが一番の肝になっている。警察で認知した場合は、市役所に放送をお願いしたり、ネットワークで情報を流したりするが、見守りネットワークを活用させてもらって事業所の方に探してもらえるとこれほど心強いものはない。認知症の方で無事に発見された場合は、この事業を積極的に紹介させてもらって登録の促進をさせていただいている。警察のほうでももっと働きかけていきたいと思う。

〈委員長〉

制度・仕組みへの質問は？ →なし

せっかくの機会ですのでそれぞれの取り組み等教えていただきたい。この場で情報共有しておきたいことがあれば発言をお願いしたい。

〈委員〉

今の状況について、主に鑑別診断と相談対応が2つの大きな事業であるが、鑑別診断については予約の枠が決まっているので、紹介いただいても待機期間が長くなっており、何とか短くできるように先生たちにも協力していただいて予約枠を増やしたりしている。それ以上に希望者が多くなっているのを待機期間がなかなか短縮できないことが課題。相談対応については、年々連携する機関が増えていてこちらからも待っているだけではなく、包括支援センターやライフドアに情報提供して、できるだけ途切れないような支援につなげていきたいということで配慮している。

〈委員〉

医療に関しては、いろんな症例をみているが、正確な診断をつけることが大事。一言で認知症といっても各々の認知症があって、いずれこうなるだろうとかこういう症状が出てくるだろうとかある程度予想がつくので、しっかりとした診断をつけたいと思っている。アルツハイマー病に関してしっかりとした診断をつけることが大事だが、前段階の軽度認知症から初期のアルツハイマー病に関しては新薬を使えるようになったので、初期の患者がいれば治療に結び付けることができる。

〈委員〉

患者に「薬は飲めていますか？」と聞くと「飲めている」と言うが、最近では残薬を持ってきてくださいという活動を各薬局で始めている。やはり飲めていない方は沢山持ってこられる方もいる。主治医にフィードバックして先生たちにあたってもらう活動も行っているので紹介しておきたい。

〈委員〉

実際、地域の方は認知症で困る方を目の前にすると地域で支えるというよりは施設へという考えがまだまだ実際としてはある。先ほどのキャラバンメイトの活動も含めて、地域の中でもっと浸透していけるといいと思う。

〈委員〉

在宅介護支援センターとして認知症で困るといったケースそれ程ないが、ケアマネジャーとして関わっていて訪問した時にどうしてこんなに認知症が進んでいるのにサービスを受けていなかったのだろうと思う方がいる。いざデイサービスといっても本人が納得せず、家族も送り出しに手間取ってしまい、さらに行けなくなってしまうので、早い段階から少し外に出るとか、サービスに少し慣れていただくことが必要かと思いつながり関わっている。

〈委員〉

この間相談された方は、入院してから認知が低下し、病院へ行ったら、検査の結果そんなに認知はないよと帰されてしまった。そのあと、市の方にも相談したが実際あなたにしてあげられることはないよと帰されてしまったとお聞きした。私もどうしたらいいかわからず、また病院に行って治療するのが一番かなと話をした。民生委員としてどうしたらいいか悩んだ。

〈委員〉

毎回参加させていただいて 3 回目になるが、だんだん時間が経つにつれて市のサービスも一個一個が充実してきているものが出てきて、それが実際に認知症の徘徊の早期発見につながったり、認知症カフェという相談の場を設けるということが広がっていったり、チームオレンジ、認知症サポーター4,000 人というのを数えて、早期発見とか見守りを住民意識の中で構築されているということが、今日伺えた。実際に認知症がこれから増えていくということが数字的に明らか。支えになる部分がしっかり構築されていくということを認識し、社会資源活用を我々が提案できるようになっていけばより住みやすい、支えやすい社会になり、一人一人の負担が減るのではないかと思った。

〈委員〉

初めて参加させていただき、皆さんが頑張ってくださっているおかげで諏訪市の医療・介護が助けられているなと感じる。今まで出てきたような難しい症例がさらに増えていくかと思う。チーム員の先生や携わる委員の方々も手間のかかる症例がますます増えていくのかなと私の患者を診ていても感じる。社会的背景やいろんな背景で普通に介護認定にのせられないということも増えていくので皆さんの力を借りながら、介護認定までまずは持っていき、介護や医療にのせるということを、医者立場からそれを粛々とやっていくしかないのかなと思う。

これからも、諏訪市医師会と併設しているライフドアを含めて全面的に医療・介護に関して協力体制を構築していきたいと思う。

7 その他 【宮坂課長】

ありがとうございました。全体を通して何かありますか。→なし

8 閉会 【副委員長】

皆さん今日はお疲れさまでした。日頃、病院で認知症の鑑別診断とか、相談に携わっていて、関係機関に連絡したり、情報提供させていただいたりする。横の繋がりがあって社協でも行ってるよとかライフドアでも訪問しているなど情報をいただけるので、今日初期集中支援チームの会議で普段から関わりを意識しておられるので、ネットワークが構築されつつあるのかなということを感じた。一言が患者さんにどう影響を与えるのか、その時その時、その人その人で考えていかなければならないのかなということを感じた。